



p4cみやぎ 1月研修会報告

オンラインによる p4c みやぎ 1月研修会

1月28日(木)に、オンラインによる p4c みやぎ 1月研修会を行いました。今回は、研修Ⅰで、宮城県立船岡支援学校の八嶋貴彦先生から、「特別支援教育における p4c の実践」という題でお話をいただきました。

その後の研修Ⅱでは、五つのグループに分かれ、研修Ⅰの内容に基づいた話し合いを行いました。

【研修1】

[演題] 「特別支援教育における p4c の実践」

[話題提供] 宮城県立船岡支援学校
教諭 八嶋 貴彦先生

1 はじめに 特別支援教育について

○障害のある子供と健常児との間には、どう接していいかわからないという見えない壁がある。障害のある子供たちへの共感的な理解が壁を乗り越える鍵となる。

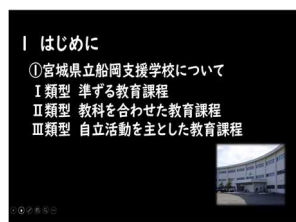
2 特別支援教育での p4c の実践

○障害という多様性は、なかなか理解しがたいところがあるが、p4c には、障害という多様性を受け入れる魅力がある。そして、p4c の対等という考え方は、障害に対する偏見を乗り越えていく力がある。

○実態や発達段階に応じたねらいを押さえることも大切。

知的な遅れがない場合は、自分や他者の考えを客観的に捉える力を育てること。

知的な遅れがある場合は、人と関わる喜びを感じることを意識して実践に取り組んでいる。重い障害がある場合は、人と関わる

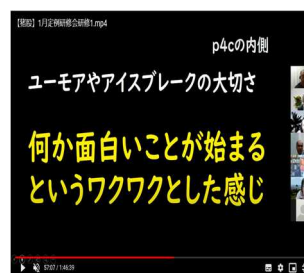


喜びを感じることを意識して実践に取り組んでいる。

3 特別支援教育からの p4c の提案

○「～だからできないではなく、～すればできる」というのが、特別支援教育の基本的な考え方である。

◎ユーモアを大切にしながら、子供と同じ目線で子供が楽しいということを感じ取れる力を私たちが高めていくことで、配慮を必要とする子供たちにも安心して p4c に参加できる機会が増えるのではないだろうか。



【研修2】

グループに分かれた話し合いでの話題

○「対等」という言葉が印象的だった。左手で書く体験をしている子供は、対等な体験をしているのではないのか。

○子供の意見に対する教師の反応に、他の生徒が左右されてしまうという悩みについて…共感できるものは「いいね」という反応があってもいいが、それ以外の生徒の考えを認めることも多様性を認める点から必要なことではないのか。

○時間と空間を共有していることでセーフティを保障しているというアプローチだった。幼児教育においても、p4c を媒介にして、そこにいることを楽しむ、満足するような実践にしていかなければならない。

○疑似体験は、子供たちにとって、言葉より説得力がある。疑似体験の持つ意味は大きい。

○普通学級においても、いろいろな表現の仕方があり、子供の表現する力は重要である。

HP (<http://p4c-miyagi.com>)

Mail (p4c@adm.miyakyo-u.ac.jp)